

福島原発事故 避難者裁判を支える会・えひめ ニュース

No. 4

2016年2月1日
〒790-0852
松山市石手2丁目9-21
TEL089-977-8155



南相馬市、浪江町 支援訪問記

午前5時に一路福島へと出発した。1月12日までの滞在予定。日本海側を走り、途中新潟では雪に見舞われたが、除雪車に先導されて通り抜けた。20時間かけて、1400キロの道のりを、1人で走り通した渡部さんのタフさには驚きだ。午前1時に南相馬に到着し、その日は渡

原発事故の生き証人「被ばく牛」300頭とともにもー浪江町「希望の牧場」

南相馬市、浪江町を訪ねて 報告 堀内英昭さん
(支える会世話人)

1月7日、ミカン箱数十ケースと、野菜などを満載して、避難者の渡部寛志さん(原告代表)のトラックに7人が乗車し、

翌日には、隣町のお祭りである「だるま市」に出品するミカンの選別や、箱詰め作業に大わらわだった。

夕方には仮設住宅へ訪問販売し、翌10日には「だるま市」へ、支援者を含め10人のスタッフでミカン売りの開始だ。掛け声勇ましく愛媛ブランドの媛マドンナ、ポンカン、南柑20号等の製品の宣伝と、試食のすすめまくり、老若男女から、おいしい、うまい、との好反応が返ってきた。見る間にマドンナは完売。続いてポンカンも売切れ。ミカンも好調な売れで、スタップも大喜びだった。また、今回の被災地の視察では、道中の空間線量計の表示が車内でも刻々と変化した。その状況には不気味さと恐怖心に襲われた。

双葉郡浪江町の「希望の牧場」の吉沢代表の話では、原発事故の生き証人「被ばく牛」300頭とともに、原発を乗り越える世の中を



目指して闘っているとのこと。飼いの皮膚に発生した白斑の異常現象や、死んだ牛や野生動物の肉を食べる銀ばえから、高い放射線量が検出されている。子どもたちの中に増えている甲状腺がんなど、日本国民にとって4度目の被ばくは、政府や東京電力の主張とは裏腹に、福島にとつて深刻な事態が進行していると痛感した。



映画「日本と原発」上映会のご案内

多くの関係者、有識者へのインタビュー。現地での情報収集や報道資料等を基に、事故に巻き込まれた人々の苦しみ、原発事故を引き起こした背景、改善されない規制基準、エネルギー政策のウソと真実を追及したドキュメンタリー。鑑賞料 500円

日時 2月7日(日)13:30~ 会場 石手寺新館(仁王門手前通路を右へ約40m) 禁煙



「支える会」会員募集中! 年会費1,000円

振込先) ゆうちよ銀行 口座記号番号16100-25698151 口座名義 福島原発事故避難者裁判を支える会・えひめ

今考えれば、あれは「いいこと」で作られていったのが、原発安全神話でした。

第4回口頭弁論が9月1日、松山地裁で行われ、約30人が傍聴しました。原告Aさん（女性）の意見陳述は、以下のような内容です。（部分要約）

私は、かつて小・中学校PTA会員だった頃、研修旅行と称した東京電力福島第一原発への見学バスツアーに3回ほど参加したことがあります。その頃は、どの学校でも同じことが行われていました。なぜなら、バス料金も昼食弁当代金も全て東京電力が出してくれていたで、ほとんどお金がかからず、安く手軽に実施できたからです。その時の東京電力社員による説明では、「二重、三重の安全対策がとられているので、万が一トラブルが起こっても外部への影響は無く、絶対に大丈夫です。」ということ、コンピュータ制御室や数々の計器類を前に、「こんなに分厚いコンクリート壁で囲み守っていますからね、両手を広げ、触れて、その厚さを実感してください。」と言っていました。この言葉になんとなく納得させられました。

今考えれば、まさにこうして作られていったのが、原発安全神話だったと思います。しかし、何度思い返してみても、津波対策の説明はありませんでした。

このバスツアーの中で、わざわざ途中下車して原発立地の大熊町へ立ち寄りしました。そこには乳幼児と一緒に鑑賞できる特別室を備えた立派なコンサートホールがあり、内部を見学しました。次は、当時珍しい夜間照明のある中学校グラウンドの視察でした。原発の固定資産税と、そこで働く多数の人々のおかげで、小さ

な町が潤っているからこそできるのだと誇らしげに語っていました。

そして、私は2010年3月31日に38年間勤め上げ、ハッピーリタイアをしました。その後は友人とのランチ会や姉妹での旅行、趣味のコーラスグループでの活動等、充実した楽しい生活を送っていました。

しかし、2011年3月11日午後2時46分、あの地震がおきました。この日を忘れることはできません。幸いにも自宅建物の被害は全く無かったと一安心したのも束の間、原発爆発という情報が飛び込んできました。その時、私はまだ原発から80キロメートル以上も離れており、あれほどの安全対策がとられているのだから、福島市は安全と考えていました。しかし、爆発当日の原発からの風向きは北北西でした。放射性物質に汚染されたホットスポットが浜通り添いの山脈をこえ、川俣から大波、そして渡利地区から蓬萊団地へと出現し、まっすぐに福島市へ移動してきたのです。

後日、政府から発表されたスピーディーのデータは、はつきりとそのことを証明していました。なぜ、どうして政府は、東京電力は、その日の内にスピーディーデータを公表してくれなかったのでしょうか。もし、当日にデータ内容を知っていたならば、私はもっと早く避難してしま

官房長官枝野氏の会見は、体内被曝の安全基準を1ミリシーベルトからいきなり10ミリシーベルトに引き上げ、「ただちに人体への影響はない」と繰り返し返すばかりでした。そして、時の総理大臣菅直人氏のベントを遅らせる指示や現場を混乱させるような行動など、今にして思えばなんとお粗末な対応だったのかと驚くばかりです。あのような民主党政権誕生に加担した、私自身も含めた福島県民にも、どうしようもなく腹が立ちます。



渡部寛志さんの自宅前に積まれた放射性廃棄物。中身は家財道具や農業資材など（2015年5月撮影）

妹の病気見舞いのために、平成27年11月はじめ1週間帰郷してきた時、姪の子供達の学校マラソン大会の応援をする機会がありました。グラウンドの中でスタートする子供達のすぐ側では除染している重機が動いていました。その横には、今までに取り除いた汚染ゴミがうず高く積みまれ、ブルーシートで覆われています。必死で走っている子供達があまりにかわいそうになり、「将来、この子供達の身体に何も起こりませんように」と思わず祈ってしまいました。その後、11月20日

に福島市の除染対策室から、福島市にある自宅の除染をするので日時の相談をしたいと電話がありました。翌日、放射性物質汚染ゴミは東日本全体に存在し、行き場がなく、袋が破れたり豪雨に流されたりと二次被害が出ているのに、そのゴミの後始末も解決の目処さえも立たないでいる現状がNHKの特集で放映されていました。

あれから4年が過ぎ、現在の住まいで落ち着いた生活になりましたが、心の平穏だけは戻っていません。生きてきた全ての思いの詰まった家や土地を捨て、両親や家族の眠る墓を捨て、兄弟、友を捨て、故郷を捨ててきたという後ろめたさ、悲しさが胸の奥に澱のように毎日毎日積もっていくからです。

生きてきた全ての思いの詰まった家や土地を捨て、両親や家族の眠る墓を捨て、兄弟、友を捨て、故郷を捨ててきたとどうして後ろめたさ、悲しさが胸の奥に澱のように毎日毎日積もっていくのです。

第5回口頭弁論のご案内

日時 3月1日(火)14:30開廷

場所 松山地方裁判所

※14時前までには地裁ロビーにお集まりください。終了後は、愛媛弁護士会館で報告集会を行います。